



TITLE:

京大広報 No. 384

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

---

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 384. 京大広報 1990, 384: 849-850

ISSUE DATE:

1990-02-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209293>

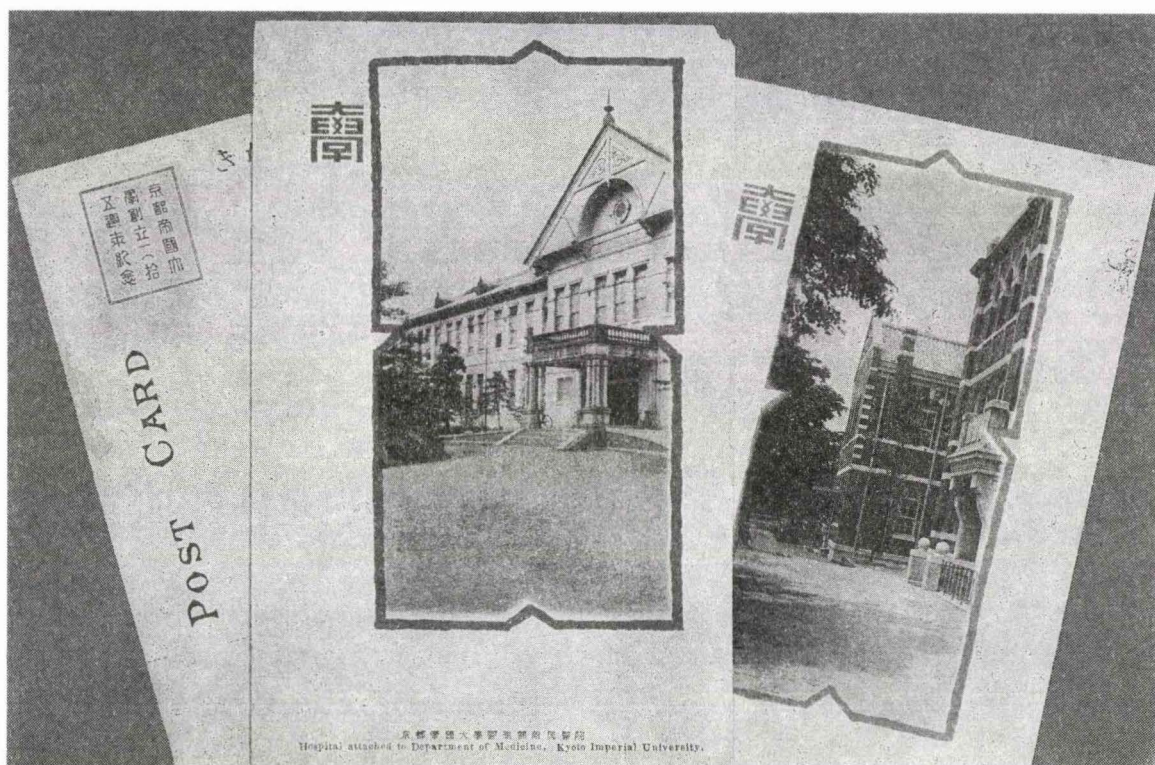
RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

# 京大広報

No. 384

京都大学広報委員会



京都帝国大学創立25周年記念絵はがき（中央：医学部附属医院，右：理学部，大正11年）

—関連記事本文860ページ—

## 目次

### <大学の動き>

- 1月11日の搜索..... 850
- 部局長の交替..... 850
- 平成元年度の停年退職教官..... 850
- 平成2年度入学者選抜学力試験  
（第2次学力検査）の期日等及び志願状況 ..... 854

### <紹介>

- 放射線生物研究センター..... 856

### <保健コーナー>

- 疲労感と健康..... 857

### <資料>

- 国立大学の学生納付金の改定に関する  
国立大学協会の要望書..... 858

### <随想>

- 新素材の周辺  
名誉教授 中島 章夫..... 859

### <コラム>

- 「うわさ」好き  
木下うわさ..... 860
- 写真集企画委員会からのお願い..... 860

## ＜大学の動き＞

## 1月11日の捜索

1月11日（木）、警察による学内及び熊野寮の捜索が行われた。

この日の捜索は、1月8日（月）の建造物侵入、火炎ビンの使用等処罰に関する法律違反被疑事件に関連したもので、本学関係者立会いのもとに午後7時25分頃から同8時頃まで教養部A号館の教室（2室）、また、午後7時15分頃から同8時30分頃まで熊野寮B棟の2室及び同室前の廊下について行われ、ピラ等が押収された。

## 部 局 長 の 交 替

## 霊長類研究所長

野澤 謙霊長類研究所長の任期満了に伴い、その後任として久保田 競霊長類研究所教授（神経生理研究部門担当）が1月16日任命された。任期は平成4年1月15日までである。

## 平成元年度の停年退職教官

京都大学教員停年規程により、次の方々（教授52名、助教授3名、講師2名、助手2名）が、本年3月31日付けで退職される。

部 局・職 名	氏 名	生年月日	出身地	講 座 等	研 究 分 野
文 学 部 教 授	吉 岡 健二郎	大正 15. 5. 3	東京都	哲 学 科 美学・美術史学 第 一 講 座	西洋近世以降の美学及び芸術学の歴史的研究、それとの対比における明治以降の日本の芸術の比較思想論的研究
〃	平 井 俊 夫	〃 15. 10. 28	大阪府	文 学 科 ドイツ語学・ ドイツ文学講座	ドイツ近代抒情詩の研究（若きゲーテの時代以降20世紀初頭まで）
教育学部 教 授	小 林 哲 也	〃 15. 12. 22	長野県	教育学科 比較教育学講座	比較教育学方法論・国際化社会における教育の諸問題に関する研究
法 学 部 教 授	太壽堂 鼎	〃 15. 5. 14	京都府	国際公法第一講座	(1)領土紛争の処理に関する研究 (2)国内裁判所における外国国家の免除に関する研究
理 学 部 教 授	黒 岩 澄 雄	〃 15. 5. 28	佐賀県	附属植物生態研究 施設 植物生態学研究 部門	高等植物の光合成・物質生産・繁殖に関する生態学的研究
〃	小 暮 智 一	〃 15. 6. 10	群馬県	宇宙物理学科 銀河物理学講座	恒星大気輻射場理論と大気構造の観測的研究 非熱電波天体の理論及び星形成領域の構造と進化に関する観測研究
〃	中 井 祥 夫	〃 15. 8. 21	京都府	物 理 学 科 輻射物理学講座	光物性物理学のうち、固体における着色中心並びに励起子に関する研究
〃	端 恒 夫	〃 15. 9. 3	滋賀県	物 理 学 科 電波光学講座	磁気共鳴及びレーザー分光学に関する研究、特に多量子 NMR の創始、コヒーレント過渡現象の総合的研究
〃	久保寺 章	〃 15. 10. 19	神奈川県	附属火山研究施設 火山物理学研究 部門	火山物理学、火山及び地熱地域の地球物理学的研究



部 局・職 名	氏 名	生年月日	出身地	講 座 等	研 究 分 野
理 学 部 授	堀 江 正 治	大正 15. 12. 15	東京都	附属地球物理学研究施設 熱水環境研究部門	日本高地の水河堆積物に関する研究 琵琶湖、バイカル湖等古代型湖堆積物の古陸水学的研究
〃	永 田 雅 宜	昭和 2. 2. 9	愛知県	数 学 科 代 数 学 講 座	数学、特に可換代数及びその代数幾何学等への応用に関する研究
医 学 部 授	村 地 孝	大正 15. 9. 19	京都府	医 学 科 臨床検査医学講座	酵素の生化学的及び臨床検査医学的研究
〃	荒 木 辰之助	〃 15. 11. 6	大阪府	医 学 科 生理学第一講座	中枢神経系、特に大脳皮質運動野における単一神経細胞の電気生理学的研究
〃	藤 原 元 始	昭和 2. 1. 1	京都府	医 学 科 薬理学第一講座	心血管及び平滑筋におけるアミン、ペプチド、プロスタグランジン類に関する薬理学的研究
〃	星 野 一 正	〃 2. 1. 2	東京都	医 学 科 解剖学第三講座	臨床に役立つ人体解剖学・生殖内分泌学・癌の細胞生物学的研究・生命倫理学
工 学 部 授	森 美 郎	大正 15. 4. 9	京都府	機械工学科 潤滑油圧工学講座	潤滑工学に関する研究 油圧工学に関する研究 機械要素に関する研究
〃	萩 原 宏	〃 15. 6. 27	石川県	情報工学科 計算機システム講座	計算機システムに関する研究 計算機方式に関する研究 マイクロプログラミングに関する研究
〃	神 野 博	〃 15. 7. 24	京都府	工業化学科 応用固体化学講座	窯炉における燃焼の研究。燃焼反応の素反応速度論による研究。セラミックスの破壊過程に関する研究
〃	赤 井 浩 一	〃 15. 11. 28	三重県	土木工学科 土質力学講座	土質基礎工学に関する研究
〃	畠 昭治郎	昭和 元. 12. 27	大阪府	土木工学科 土木施工学講座	建設機械作業部分及び走行装置の機能を向上させる合理的設計方法に関する研究 土木施工の合理化に関する研究
〃	鍵 谷 勤	〃 2. 1. 22	北海道	石油化学科 触媒物理学講座	反応設計論に基づく触媒物理学及び放射線化学の基礎と応用に関する研究
〃	福 澤 文 雄	〃 2. 1. 31	京都府	原子核工学科 原子核機器学講座	加速器技術の開発と応用に関する研究。イオンビーム・物性相互作用の研究。高速微粒子イオンに関する研究
〃	藤 中 雄 三	〃 2. 2. 10	京都府	資源工学科 応用計測学講座	電気雷管の斉発性に関する研究。ワイヤーロープの非破壊検査法の研究。ワイヤーロープの劣化と安全性の研究
〃	川 端 昭	〃 2. 3. 5	滋賀県	電子工学科 量子エレクトロニクス講座	強誘電体、圧電体、圧電半導体、焦電体など機能性電子材料の製法とその応用に関する研究
〃	西 村 孟	〃 2. 3. 7	滋賀県	共 通 講 座 工業数学講座	微分環、べき級数環の研究及び有限環、有限体の研究とそのシステム理論への応用に関する研究
〃	倉 知 三 夫	〃 2. 3. 8	京都府	冶金学科 電気冶金学講座	金属マンガ、クロムの電解製造法に関する研究。合金の電解析出に関する研究。金属製錬工業の排水処理対策
〃	松 浦 邦 男	〃 2. 3. 21	大阪府	建築学第二学科 建築環境調整学講座	建築環境工学、特に建築照明、建築音響に関する研究

部局・職名	氏 名	生年月日	出身地	講 座 等	研 究 分 野
農 学 部 教 授	志 水 寛	大正 15. 4. 11	兵庫県	水 産 学 科 水 産 化 学 講 座	魚肉タンパク質の食品原料学的研究
〃	三 好 正 喜	〃 15. 6. 22	香川県	農林経済学科 農 史 講 座	日独農業経営・農法の諸類型に関する比較史的研究及び戦間期における小農の経営類型と運動法則に関する研究
〃	山 下 律 也	〃 15. 7. 7	岡山県	農業工学科 農産加工機械学 講 座	農産物の収穫後処理及び品質管理技術(乾燥・貯蔵・選別・加工・包装等)に関する研究
〃	阿 部 亮 耳	〃 15. 8. 21	京都府	附属農業簿記研究 施設 農業簿記研究部 門	農業会計原則, 農業税務会計, 農作物原価計算, 農業の地域会計, 社会会計・農業会計情報と処理に関する研究
〃	森 田 學	〃 15. 9. 30	広島県	熱帯農学専攻 国際林業論講座	国際林業論に関する研究特にアグロフォレストリーと地域林業の組織化に関する研究
〃	岸 根 卓 郎	昭和 2. 2. 12	兵庫県	農林経済学科 林 政 学 講 座	森林の経済・公益両機能の調和に関するシステム論的研究及び農林業を中心とする国土政策に関する研究
〃	武 居 有 恒	〃 2. 3. 6	京都府	林 学 科 砂 防 学 講 座	土砂の生産・流出機構並びに土砂災害防止対策に関する研究
教 養 部 教 授	木 方 洋	大正 15. 4. 25	岐阜県	物 理 学	金属・高分子等の結晶の塑性・成長等に関する研究
〃	青 木 啓 治	〃 15. 5. 26	山口県	英 語	シェイクスピアに関する研究
〃	熊 本 水 頼	〃 15. 8. 12	福岡県	保 健 体 育	身体運動制御機構のバイオメカニクス研究
〃	筧 田 知 義	〃 15. 10. 8	富山県	教 育 学	(1)日本の高等教育の成立と特質に関する研究 (2)幼児教育の教育課程編成の基本方針と形態並びに内容の研究
〃	岩 井 信 之	〃 15. 11. 5	滋賀県	保 健 体 育	血管系成人病の予防と治療に関する研究
〃	大 塚 香 代	昭和 2. 1. 13	兵庫県	数 学	代数学特に代数幾何学・可換環論の研究
〃	柳 生 等 和	〃 2. 1. 23	奈良県	数 学	微分幾何学特に大域微分幾何学の研究
〃	富 岡 次 郎	〃 2. 4. 1	兵庫県	歴 史 学	現代イギリスにおけるカラード移民の雇用, 住宅及び教育に関する研究
化学研究所 教 授	竹 腰 秀 邦	大正 15. 10. 3	台北市	附属原子核科学研究施設	加速器に関する研究
原子エネルギー 研究所 教 授	櫻 井 彰	昭和 2. 3. 18	東京都	原子炉構造研究部 門	原子力利用にかかわる通常液体, 高温金属液体, 極低温液体における定常, 非定常熱流体力学に関する研究
木材研究所 教 授	越 島 哲 夫	大正 15. 9. 24	石川県	木材化学研究部門	木材の糖質及び関連成分とその変換に関する基礎的研究

部 局・職 名	氏 名	生年月日	出身地	講 座 等	研 究 分 野
木材研究所 教 授	山 田 正	昭和 2. 1. 15	福井県	木材物理研究部門	木材の界面性に関する研究。木材の レオロジーに関する研究。木質環境 に関する研究。木材加工に関する研究
〃	角 谷 和 男	〃 2. 2. 19	大阪府	木材生物研究部門	木本食物の組織培養に関する研究 木本食物培養細胞の分化に関する研究
防災研究所 教 授	石 原 安 雄	大正 15. 4. 8	京都府	附属水資源研究セ ンター	水資源・水害の水文学的研究
基礎物理学研究 所 教 授	西 島 和 彦	〃 15. 10. 4	東京都	原子核理論研究部 門	種々の対称性に基づいた素粒子の基 本的性質に関する場の理論的研究
原子炉実験所 教 授	石 田 政 弘	昭和 元. 12. 27	京都府	核生物学研究部門	葉緑体を遺伝情報源とした光合成器 官の生体高分子の生合成及び分子集 合に関する分子遺伝学的研究
霊長類研究所 教 授	大 島 清	〃 2. 1. 25	広島県	生 理 研 究 部 門	霊長類の生殖生理学に関する研究
アフリカ地域研 究センター 教 授	伊 谷 純一郎	大正 15. 5. 9	鳥取県	湿潤帯生態系研究 部門	アフリカの自然に強く依存して生き る人々の社会と霊長類社会を対象と した人類社会形成復元に関する研究
文 学 部 助 教 授	西 谷 裕 作	〃 15. 9. 29	京都府	哲 学 科 倫 理 学 講 座	西洋の哲学, 特に倫理思想を中心と した歴史的, 体系的な研究
農 学 部 助 教 授	松 尾 嘉 郎	〃 15. 6. 23	岡山県	農芸化学科 土 壌 学 講 座	土壌化学と実験計画法に関する研究
教 養 部 助 教 授	後 藤 雄 三	〃 15. 9. 8	香川県	数 学	微分幾何学特に射影微分幾何学の研 究
理 学 部 講 師	村 田 源	昭和 2. 1. 24	京都府	植 物 学 科 植物分類学講座	日本の植物相に関する研究 (日本産 野生植物についての分類学的・植物 地理学的研究)
医 学 部 講 師	石 川 嘉市郎	〃 2. 1. 1	山形県	医 学 科 内科学第三講座	高安病 (高安動脈炎) の臨床的研究 (自然経過, 診断基準, 治療, 予後)
理 学 部 助 手	布 施 慎一郎	大正 15. 7. 6	山口県	附属瀬戸臨海実験 所	海洋生態学 (沿岸海域内湾の環境科 学的研究・藻場の生物群集の研究及 び磯魚の食物連鎖構造の研究)
化学研究所 助 手	牧 俊 夫	〃 15. 9. 25	京都府	窯業化学研究部門	ガラス及びセラミックス等の無機材 料の合成, 物性並びに構造に関する 研究

京都大学医療技術短期大学部教員停年規程により, 次の方が, 本年 3 月 31 日付けで退職され  
る。

部 局・職 名	氏 名	生年月日	出身地	講 座 等	研 究 分 野
医療技術短期大 学部 教 授	大 橋 ミ ヅ	大正 15. 11. 5	大阪府	教 養 科	パーソナリティの発達及び適応に関 する研究



# 平成2年度入学者選抜学力試験（第2次学力検査） の期日等及び志願状況

平成2年度入学試験（第2次学力検査）を、次の予定で実施する。

## 1. 第2次学力検査の期日等

### ○前期日程試験

月 日	教 科	学 部	時 間
2月25日（日）	国 語	文・教育・法・経済「一般」	午前9時30分～11時30分
		理・医・農	午前9時30分～11時
	数 学	文・教育・法・経済「一般」	午後1時～3時
		理・医・薬・工・農	午後1時～3時30分
	論 文	経済「論文」	午前9時30分～12時30分
			午後2時～4時30分
2月26日（月）	外 国 語	文・教育・法・経済「一般」・理・医・薬・工・農	午前9時30分～11時30分
	理 科	理・医・薬・工・農	午後1時～3時30分
	社 会	文・法・経済「一般」	午後1時～2時30分
	論 文	経済「論文」	午前9時30分～12時

### ○後期日程試験

月 日	教 科	学 部	時 間
3月14日（水）	国 語	文・教育・経済	午前9時30分～11時30分
		医	午前9時30分～11時
	数 学	教育・経済	午後1時～3時
		理・医・薬・工・農	午後1時～3時30分
	論 文	文	午後1時～3時
3月15日（木）	外 国 語	文・教育・法・経済・医・薬・工・農	午前9時30分～11時30分
	理 科	理・医・薬・工・農	午後1時～3時30分
	論 文	教育	午後1時～3時
		法	午後1時～3時30分

## 2. 志願票の受付

志願票の受付は、1月22日（月）から1月31日（水）までの間に、各学部で行われた。

学部別の入学志願者数は、次表のとおりである。

学 部		募 集 人 員	志 願 者 数	倍 率	(参考) 元 年 度	
					志 願 者 数	倍 率
文 学 部	前 期	190 人	625 人	3.3	849 人	4.5
	後 期	30	517	17.2	327	10.9
教 育 学 部	前 期	40	146	3.7	204	5.1
	後 期	20	151	7.6	161	8.1
法 学 部	前 期	340	1,031	3.0	1,830	4.6
	後 期	60	724	12.1		
経 済 学 部	前 期 (一般)	150	526	3.5	507	3.6
	〃 (論文)	60	765	12.8	592	9.9
	後 期	40	506	12.7	310	7.8
理 学 部	前 期	276	1,283	4.6	1,533	5.6
	後 期	30	1,376	45.9	1,326	44.2
医 学 部	前 期	90	439	4.9	682	6.2
	後 期	10	207	20.7	179	17.9
薬 学 部	前 期	60	174	2.9	189	3.8
	後 期	20	145	7.3	170	5.7
工 学 部	前 期	626	2,098	3.4	2,605	4.2
	後 期	414	2,757	6.7	2,044	4.9
農 学 部	前 期	260	778	3.0	1,010	3.9
	後 期	65	551	8.5	513	7.9
合 計		2,781	14,799	5.3	15,031	5.4
前 期		2,092	7,865	3.8	8,171	4.7
後 期		689	6,934	10.1	5,030	7.9
				B 日程	1,830	4.6

(注) 法学部（後期日程）と経済学部（後期日程）の募集人員には、外国学校出身者のための選考の募集人員20名以内と10名以内とを含む。また、両学部の志願者数には、同選考試験志願者69名と45名とを含む。



## &lt; 紹 介 &gt;

## 放射線生物研究センター

本センターは、日本学術会議の勧告(昭和43年)に基づき、全国共同利用の研究施設として昭和51年に本学に設置されたもので、「放射線は生命にどう働くか」という課題を研究し、それを新しい生命科学にまとめあげることがを目的としている。現在の部門構成は、放射線システム生物学研究部門、突然変異機構研究部門、晩発効果研究部門の3固定研究部門と、核酸修復客員研究部門、放射線類似作用客員研究部門の2客員研究部門からなっている。

世界唯一の原爆被曝国であるわが国では、放射線のおよぼす人体影響への関心は非常に高い。一方、診断や治療など日常の医療の面で放射線の恩恵を受けていることも事実である。このように放射線は「両刃の剣」に喩えられるように危険性と利益の両面を持つものである。放射線生物学は、この放射線の生物に対する作用を正しく評価するために、その背後にある真実を明らかにしようとするものであって、本質

的にはきわめて基礎的な研究分野である。また、放射線生物学は学際的な学問領域であることも特徴であり、放射線そのものの物理学的理解をはじめ、化学、生化学、遺伝学、医学、薬学、工学、農学などの広い分野にわたる境界領域を基盤としており、各分野の研究者の協力と交流なくしては強力な研究を推進することは困難である。本センターが全国共同利用施設として設置された背景にはこのような放射線生物学の学際性がある。

各部門の研究課題の代表的なものとして以下のものがあげられる。放射線システム生物学研究部門では、紫外線や放射線、あるいは放射線と類似した作用を持つ化学物質によって作られる DNA

損傷の修復機構に関する研究を行っている。大腸菌など簡単な生物では修復酵素の遺伝子が単離されているが、当部門では、組換え DNA の技法を使って大腸菌の DNA 修復遺伝子をヒトの培養細胞の染色体に組み入れることによって、この細胞を発癌剤に対して数十倍も抵抗力を持たせることに成功し、世界の注目をあびている。また、最近では、宇宙放射線の生物影響など、21世紀の放射線生物学の新しい課題にも積極的に取り組んでいる。

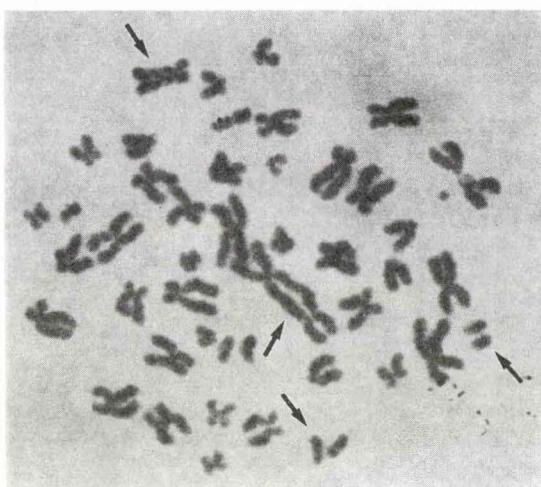
突然変異機構研究部門では、放射線によって生じる染色体異常などの突然変異の機構、及び発癌

と突然変異の関係についての研究が行われている。最近、シンクロトロン放射光や特性X線の利用が可能となり、放射線による染色体突然変異や致死損傷など、生物学的傷害の基礎過程に関する多くの新しい事実が明らかにされている。また、染色体異常を指標とすることによって、放射線被曝の線量推定やリスク評価も当部門の主要な研究課題となっている。

晩発効果研究部門では、癌細胞に対するリンパ球の免疫学的認識と傷

害機構について研究が進められている。最近、リンパ球の一種から作られる強力な癌細胞の殺傷力を持つタンパク質の分離に成功した。LGL-CF と呼ばれるこのタンパク質の癌細胞殺傷力は、従来知られている腫瘍壊死因子 (TNF) の1万倍以上であり、臨床応用の面からも大きな期待が寄せられている。また、当研究部門では、そのほか放射線傷害の防護物質、発癌や加齢の促進など被曝後長期間を経て発現する障害と免疫系の関係など、放射線の晩発効果の防護についての研究がなされている。

本センターは設立当初より、全国共同利用活動の一環としての研究交流及び情報交換に重点を置



1987年9月にゴイアニア市(ブラジル)で起きた $^{137}\text{Cs}$ 事故では244名の住民が被曝した。写真は、その被曝者の一人のリンパ球の染色体を示す。矢印は放射線によって形成された染色体異常。染色体異常から推定される被曝線量は約2.5グレイ(250ラッド)となる。

き、これまでに国際シンポジウム9回、ワークショップ形式の国際集会2回、国内シンポジウム及びワークショップ18回を開催してきた。これらの国際・国内研究集会は、放射線の生物作用の基礎的問題に関する多くの新しい情報を提供する本センターのユニークな共同利用活動として、国内外の研究者に高く評価されている。

昭和59年には、研究棟が医学部構内に完成し、全国の放射線生物学研究者による本格的な来所共同利用も始まった。大型機器を持たない本センターの全国共同利用は、おのずからユニークなものである。すなわち、分子レベルから動物実験までを一貫して系統的に研究を行う本センターでの共同利用活動を通じて、研究者間の連携と情報交換を活発化し、全国の放射線生物学並びに関連分野の研究の発展に寄与したいと考えている。

(放射線生物研究センター)

#### 保健コーナー

### 疲労感と健康

労働にしても、スポーツでも続けていると、能率、ペースが低下してくる。興味を感じて読書していても理解力の低下を自覚してくるようになる。このような場合に、短時間の休息又は睡眠によって元気をとり戻すことができる。この身体状況の変化が疲労であり、疲労の回復である。身体の疲労の程度とその回復の経過を自覚することが疲労感であり、それが自身の健康度を判断するために最も手近な目安であろう。

日常茶飯事として、疲労、疲労感と健康については、既にすべて解明されていると理解されているかもしれないが、なお多くの研究課題が残っている。

疲労感と健康に関する話題資料として、疲労の種類、本態、対応法などについて纏めてみた。各自の疲労感と健康感への対応に役立つことがあれば幸いである。

#### 疲労の分類

疲労は精神的疲労と肉体的疲労に大別される。

しかし、この両者は、それぞれ別個に出現するものではない。例えば、スポーツ競技では肉体的疲労のみならず、記録を上げるための戦略の検討、競技中のとっさの判断など精神<sup>ろうき</sup>労作による精神的疲労がある。このように質的に異なる両者が関連し合って出現する。なお、量的(程度)分類として、疲労、過労と疲労困憊<sup>ろうき</sup>があり、疲労感も深刻なものとなる。疾病症状、薬物副作用によって同様の疲労感を生じるが、これらは疲労、労作が原因ではないので一般的疲労と区別されている。なお又、同程度の心身の労作によって出現する疲労・疲労感には質的、量的に個人差があり、同一個人についても心身のコンディション、環境条件による相違もあるので、研究課題としての対応法も複雑なものとならざるを得ない。

#### 疲労の本態

疲労の本態について心理学的、生理学的に多くの研究業績があるが、決定的な定説が得られていない。諸説の中、代表的なものについて、その概略を次に記す。

**消耗説:** 体力エネルギー源の消耗、枯渇が疲労の本態とする考え方である。運動を対象とした研究から運動のエネルギー源は糖、脂肪、蛋白であり、この順に利用される。糖の利用がすすみ血糖が低下してくると空腹感、集中力減退など疲労感<sup>ろうき</sup>が出現する。この時点の糖質補給によって運動効率の向上がみられる。運動を継続し、エネルギー源として筋肉の蛋白質を利用する段階になると作業能率は低下する。その他ビタミン類の消耗も疲労と関係がある。

**蓄積説:** 身体的労作に伴って生じる種々の代謝産物の蓄積が疲労を惹起するとする考え方である。糖、脂肪、蛋白分解産物の蓄積と筋肉の収縮異常、作業能力の低下との関連が解明されている。

**状態説:** 運動に伴い、呼吸促進、血圧上昇、発汗、血液濃縮など体内には種々の物理・化学的変化が生じる。これらの変化が心身全般の機能性と活動性を低下させ、疲労症状を惹起するとする説である。

**調節説:** 外部、内部環境の変化に対応しながら生命維持のため身体内部環境を一定範囲内に維持、調整する機構(恒常性維持機構)が自律神経等と内分泌系などにより保持されている。運動に



よる体調変化は交感神経緊張と関連するホルモン系によって調整されているが、運動が継続されて心身の機能・機構の両面に変動をもたらす危険性をもつ段階になれば、副交感神経緊張とホルモン系による抑制調整機構が自律的に作動することになる。この総合的表現を疲労感とする考え方である。

## 対 策

対策は回復と予防であろう。

回復の原則は休養と栄養補給である。

休養手段としては睡眠が最善であろうが、疲労の直接原因となった労作と質的に異なる労作又は運動が、心身の疲労回復に効果があることも忘れてはならない。前者を消極的休養とすれば、後者は積極的休養である。

栄養補給はエネルギー源の補給として糖質、ビタミンB群、Cとミネラルと水分補給が重要である。蛋白質と脂肪の補給も機能増進上必要である。

予防法として自律神経系の調整のため、日常的に規則的な生活習慣の確立が指摘されている。その他平素のトレーニングによる体力作り、日常の栄養管理などに留意することがすすめられている。心労問題にも消極的に終始せず、気安く発想転換して積極的に対応することが良策であろう。

身体的、精神的疲労感は個人差があり、自然科学的に研究対象とするには課題が多い。疲労は心身機能の低下状態と捉えられがちであるが、軽度の疲労感を覚える労作は却って心肺機能、精神機能に刺激を与えて、機能増強に役立つものとなり、適応水準を高め、より高度の機能獲得が期待される。しかし、一方ではそれ以上の労作継続にブレーキ又はストップ信号を発信して、心身の決定的破壊を事前に防止している可能性も否定できない。疲労感は健康保持、増進に関して重要な自覚症状とも考えられる。

(保健管理センター 小川隆三)

## <資 料>

### 国立大学の学生納付金の改定に 関する国立大学協会の要望書

国立大学協会は、次の要望書を関係方面に提出した。

平成元年12月19日

国立大学協会会長

有 馬 朗 人

#### 国立大学の学生納付金の改定について（要望）

国立大学の予算につきましては、厳しい財政事情のなかで種々配慮を頂いていることに対し、深く感謝の意を表するものであります。しかしながら、明年度の予算編成にあたり、国立大学の学生納付金（授業料）の増額改定が検討されていると伝えられていることについては、国立大学協会として深く憂慮し、強い危惧の念を表明せざるを得ません。

国立大学の学生納付金については、近年繰り返されてきた増額改定により、学生生活の諸経費の高騰と相まって、その父母の家計への負担は著しく大きくなってきて

おります。国立大学は、我が国の高等教育が総体として均衡のとれた発展をとげるよう、国の責任において全国的にバランスをとって配置されているものであり、高等教育の機会均等の実現を基本的な使命の一つとするものでありますが、学生納付金のこのような増額は機会均等の最小限の保証をも奪いかねず、ひいては、国立大学の本来の使命達成を危うくするものであります。

また、大学教育は、学生個人のためであると同時に、社会的要請に応じて有為な人材の養成をおこなっており、国と社会はその最大の受益者であります。とくに、国立大学には社会的要請に対応した人材養成が強く求められています。したがって、国立大学の学生納付金については、いわゆる受益者負担の原則を単純に適用すべきではなく、ましてや、コスト主義に基づく専門分野間格差を導入することなどは到底認められないところであります。

国立大学協会では、財政収入増の観点から授業料、入学科等の隔年ごとの改定を定着させることについては、かねてから、遺憾の意を表しているところでありますが、政府におかれましては、われわれの意のあるところをご賢察の上、とくに今回の国立大学学生納付金の取扱につき、十分、慎重を期せられますよう、ここに重ねて強く要望いたします。





# 洛書

噂や流言の問題  
に関わりだしたの  
は学部3回生の  
頃であるから、そ

のつきあいの歴史は長い。噂に興味を持ったのは、それが日常的でインフォーマルな会話の過半数を占めること、したがって、人間のコミュニケーション行動を総体として理解するには、一見俗界のできごとに属する噂のメカニズムを分析することが、絶対に必要だと思ったからである。

しかしながら、私の「学問的受難」もこのときから始まった。新しい噂が流れたすと、たいてい友人は私の顔を疑わしそうに見て、“犯人はおまえやろ”というのである。ひどい奴は、疑いを通り越して最初から私を犯人と決めてかかり、“今度のおまえの噂はなかなか良かった”と褒めてくれたりする始末である。

ここまで人に疑われるのなら、いっそ噂の卸問屋として、“よろず噂を買います売ります”の看板を掲げたほうが良いのではないかと思うことがある。事実、江戸時代には、それを商売にしていた古本屋の由蔵という男がいたようで、「本由は人のうわさで飯を食ひ」という川柳が残されている。学問的な言葉に置き換えれば、彼はさしずめ「噂ネットワークのキーパーソン」ということになるだろう。

だがこのような職業を成り立たせるには、噂の好きな人が多数存在することが、必須の条件になる。そして幸いなことに、人間はまず例外

なく噂好きなのである。人の噂以上にうまい酒の肴はないことは、みなさん自身が先刻ご承知であろう。

私の手元には、噂のダイナミックスに関する学問的な実験・調査データのほかに、これまでに収集した大量の噂コレクションがあるが、その中には、口裂け女、マクドナルドハンバーガーの肉、コカコーラと入れ歯、タクシーから消えた女、当たり屋、人面犬といった、マスコミまで賑わせた著名なものから、知人の動静、男女のロマンスのような限られた範囲の個人的噂にいたるまで、実にさまざまな内容が含まれている。

もちろん京大内部の噂も沢山あって、先生方の授業の面白さや単位の取りやすさ、西部のネ

コ、教養のキリン、政治的セクトの裏話、マジンガーZの秘密工場など、これまた多種多様であ

る。文字通り私たちは、日々噂に埋もれ、噂を食べて生きているのである。

このように書くと、私はいかにも噂好きの噂人間に聞こえるだろうが、その私も兜を脱ぐ噂ファンがこの京都に一人いる。その方の本業はお菓子屋さんで、まずその登録商標が「京のうわさ」。それに包装紙も噂という字模様で、趣味でされているテニスのサークル名が「rumor tennis club」という凝りようである。その上、お嬢さんの名前がなんと「うわさ」。おそらく世界に二つとない素敵な名ではないか。

まだお会いしたことはないが、さぞ名前にふさわしい魅力的な女性に違いないと、早くも仲間内で噂が広がっている。(木下うわさ)

## 「うわさ」好き

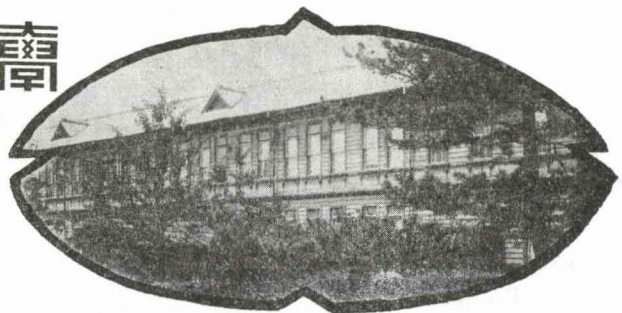
木下 うわさ

### 写真集企画委員会からのお願い

写真集企画委員会では、かねてより本学の歴史に関係する写真等の資料を収集しており、教職員・学生の方々にご協力をお願いしております。(京大広報No.354参照)

ご協力いただける方は、庶務部広報調査課(内線2070, 2073)までご連絡くださるようお願いいたします。

南



大正11年(1922)当時の文学部—京都帝国大学  
創立25周年記念絵はがきより—<元職員伊佐憲治氏提供>